「平和にユナイト！パキスタンにおける青少年の地域平和活動とアフガニスタンとの連帯」（1 年度目）完了報告書

一般社団法人平和村ユナイテッド（2020 年 5 月 14 日）

ユースピークアクション例：グループハウス（養護施設）で暮らす、多感な子どもたち…様々なリスクにさらされやすいとも。SNS の平和的でポジティブな利用や、過激思想によるその悪用がよくないことなどを伝えました。椅子取りゲームなども行い、楽しい時間も！女性ユース主導！

【目次】

- 青少年ピースアクション一覧（15 アクション）（青少年自らの発案・実施） p.2
- 活動概略 p.3
- 活動の成果と課題 p.4
- 活動 1：準備活動 p.5
- 活動 2：関係者との協議 p.5
- 活動 3：青少年ワークショップ p.8
- 活動 4：社会アクションプロジェクト（ピースアクション） p.11
- 活動 5：アフガニスタンとの交流・平和のための両国間の連帯 p.16

ピースアクション例：荒れた通りが暴力や争いを呼び込んでいる？ユースは清掃をし、ピースアートを描きました。アートは表現・創造・自由・平和を体現します。地域の人びとも集まり、友好の場となりました！あれ、子どものカードが逆さま（ほっこり）。

青少年ピースアクション一覧（15 アクション）

①平和に関する討論大会

②パキスタン&アフガニスタン・ユース対話

③紛争や過激化で失われたパシュトゥ詩の復興

④健康・衛生の啓発活動

⑤ストリート・ピースアート

⑥読書クラブ活動

⑦薬物乱用に NO！キャンペーン

⑧宗派・宗派間共生の啓発活動

⑨グループハウス（養護施設）の子ども支援

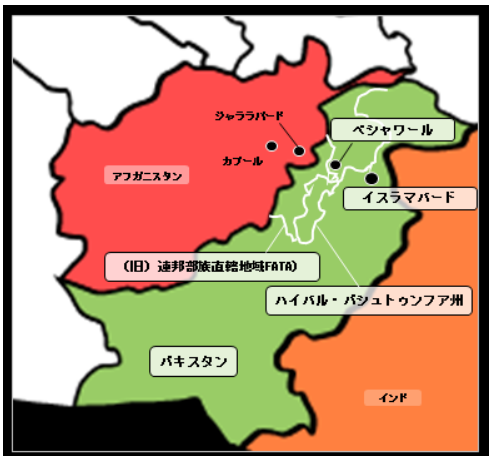
⑩紛争や過激化で失われた地域の寄り合い場「ヒュジラ」の復興

女性グループのアクション：
⑫パシュトゥ社会（アフ・パク両国にまたがる民族）における女性教育の啓発活動
⑬パシュトゥ社会における女性にとっての職業訓練の役割についての啓発活動
⑮イスラムにおける女性の権利に関する議論
※現地での女性がおかれた状況や本人たちの希望により写真掲載ができなかった。

⑪過激思想に対するイスラム学者の統一見解に関する議論

⑭地域社会の紛争を防ぐための議論

活動概要



【活動概要】

パキスタンとアフガニスタン国境地帯には様ざまな武装勢力が存在している。両国市民とも戦闘や厳しい治安状況の犠牲となっており、このことがまた、復讐心などから暴力的な過激主義の影響を受けやすい状況にもつながりうるという悪循環にもなっている。**青少年層はこうした過激主義の影響を受けやすく、さらには戦闘などの「訓練」を受け（させられ）たりする状況があり、自爆攻撃の大多数が青少年によって行われているともいわれる。パキスタンのこうした青少年たちは、アフガニスタンでの戦闘にも向かっているともいわれる。**

そこで、**①パキスタンのアフガニスタンとの国境地帯にて、青少年が何らかの平和的な地域活動を自ら立案し、実施することをサポートし、平和的な手段での自己肯定につなげてもらうとともに、こうした活動によって地域からの平和をつくる活動を行う。**

また、パキスタンとアフガニスタンの両国間で「相手国側が自国の利益のために自分たちを攻撃する武装勢力を支援している」といった相互非難も見られる。

そこで、**②活動に関わったパキスタンの青少年たちを中心に、アフガニスタンとの交流を行い、平和のための両国間の連帯につなげる。**

【活動期間】

2019 年 10 月–2020 年 3 月（初年度）（2 年度目以降も類似の活動予定）

【活動場所】パキスタンのハイバル・パシュトゥンフワ州の州都ペシャワール（紛争の影響を強く受けるアフガニスタンとの国境地帯）

【現地パートナー団体】Sustainable Peace And Development Organization (SPADO)：これまで、本活動と類似の平和のための活動も多数実施。

活動の成果と課題

- **計画時に「期待される成果」として計画したものと、実際の達成状況。**

・ 「過激主義の影響を受けやすい青少年に、平和的・非暴力的な形で、感情を表現・共有できる、自己実現を行う、他者と関わる、社会参加する場を提供することができる。」→**〇達成**：青少年たちが本平和活動に集い、それによって、平和的な集いや活動の場、拠点、ネットワークを形成・強化することができた。

・ 「青少年自らが平和的な社会参加の活動を行うことで、さらなる自己肯定を平和的な形で行ってもらうことができる。」→**〇達成**：青少年自身の発案・実施で、驚くほど興味深く、多様な 15 のピースアクションが、活き活きと行われた。

・ 「青少年の活動を通じて、社会の平和につながる活動自体も促進することができる。」→**〇達成：**活動は、青少年の平和的な自己実現となったことに加え、地域社会の多様な層の参加、協力も得ながら、地域に応じた、地域からの平和をつくる活動となった。

・ 「事前協議や活動実施中の、多様な主体による活動参加によって、地域社会全体で青少年や平和をつくる活動への理解と協力が進む。」→**〇達成**：上記のように地域社会の多様な層の参加、協力も得ながら活動が実施され、参加者・協力者を中心に、地域の平和の担い手、またその活動の場や拠点を形成・強化することができた。

・ 「実際に、地域社会から暴力や紛争がなくなっていくようになる。」→**〇達成の検証要。**動きとしては達成と考えられるものの、活動完了直後のため、検証要。

・ 今回は活動を行わなかった他の地域でも、活動への理解や、実際の類似の活動につながっていくようになる。→**〇達成の検証要。**活動成果の実現と加え、それらが可能であることを、広く社会に示すことができた。一方、動きとしては達成と考えられるものの、活動完了直後のため、検証要。

・ パキスタンとアフガニスタンの青少年の交流を通じて、両者間の信頼醸成や、平和に向けた連帯や活動につながっていくようになる。→**〇達成の検証要：**両国の青少年自身の活動参加を含め、両者間の対話、協力、連帯を実現することができた。また、アクションの 1 つが対話そのものを実施するものであった。一方、動きとしては達成と考えられるものの、活動完了直後のため、検証要。

・ こうした交流の様子に触れた他の人びとにも影響を与え、両国間の信頼醸成や、平和に向けた連帯や活動に、一定程度、つながっていくようになる。→**〇達成の検証要。**動きとしては達成と考えられるものの、活動完了直後のため、検証要。

- **計画時に「期待される成果」として記述していなかったが、特筆すべき成果となったもの。**

・ アフガニスタンや国境地帯出身者、多様な宗教・宗派、女性たち、トランスジェンダー、チャレンジドの青年たちを含む多様な層の参加となり、過激化が広がり、他者を攻撃・排斥するような状況があった紛争地にて、多様性の共存を実現できた。

・ 女性の社会参加や権利享受が困難な地域であるが、地域社会との適切な関係を持ちつつ、女性の活動参加や権利の啓発活動を実現することができた。

- **課題**

・ 過激化や紛争に苦しんできた地域であり、こうした平和の試みはまだ限定的である。社会の一部において一過性のものとして行うような平和の取り組みでなく、社会に根付き継続した（＝広く深く長い）取り組みを実施する必要がある。

・ 一定実現できたものの、女性の社会/活動参加や権利享受には依然、困難がある。

個々の活動報告

【活動１：準備活動】

計画	① スタッフ雇用・研修、関係者への活動の導入的説明など（1 か月目）
報告	【スタッフ雇用・活動最終確認・オリエンテーション】 5 ・ 10 月 3 日。SPADO ペシャワール事務所。 ・ プロジェクトコーディネーター、サポートスタッフ（男女各 1 名）、会計スタッフ、青年ボランティア 2 名。 ・ 活動目的・内容、スケジュールなど確認。 【スタッフ・オリエンテーション】 ・ 10 月 7 日。SPADO ペシャワール事務所。 ・ プロジェクトコーディネーター、サポートスタッフ（男女各 1 名）、会計スタッフ、青年ボランティア。 ・ 各活動内容、実施方法、行動基準、リスクの可能性と対処などを確認。 【スタッフ研修】 ・ 11 月 12 日。SPADO ペシャワール事務所。 ・ 全スタッフ ・ 活動実施・会合・報告・会計・物資サービス調達手続（ガイドライン）の説明。青少年参加者選考の基準、地域社会との連携方法の説明、ここまでの進捗確認など。 【関係者への活動の導入的説明】 ・ 10 月 1 日-11 月 10 日。ペシャワール郡政府事務所。 ・ 青少年、社会福祉、社会活動、情報の権利、平和と紛争に関わる部署の関係者、計 8 名。 ・ 活動の導入的説明、連携方法の議論、KP 州の青少年が直面する問題の共有など。 【関係者への活動の導入的説明】 ・ 10 月 1 日-11 月 10 日。諸事務所や諸地域内。 ・ 地域活動家、宗教学者、人権活動家、市民社会組織（CSO）関係者、青年活動家、計 6 名 ・ 活動の導入的説明、連携方法の議論、関係者からの地域の青少年代表者のリストの提示など。

【活動２：関係者との協議】

計画	② 青少年グループ（リーダー）との協議（10 人/1 グループが 5 グループ）（2 か月目 1・2 週）：プロジェクトについての説明、地域状況の聞き取り（暴力・紛争・原因・関係主体・平和に必要なもの・活動参加候補者などについて）、本活動への参加促進。準備段階から協議をすることによって主体的に関わってもらう。
報告	・ 11 月 25 日。ペシャワール市内のゲストハウス会議室。 ・ 5 グループ、計：36 名（男性 32 名・女性 4 名）、18-29 歳。様々な背景・宗教・宗派の青年たち。女性の参加が難しい。 ・ 活動説明、地域状況の聞き取り、本活動への参加促進、活動参加青年の選考など。 ・ 提起された主要な論点は以下。

- 紛争で社会や文化も破壊されており、多数の青少年が戦闘員にならざるをえないような状況にある。
- 社会や青少年の過激化で、大学も含め多様な人々が集う場が縮小。対話や交流が必要とされている。
- 通う学校の種類により（公立・ウルドゥ後／私立・英語／宗教学校マドラサ）、青少年の考え方に違いが生まれてしまう。それらを最小限にする必要がある。
- メディアに民族的偏見を煽られる。
- 誤った道に誘導される、フラストレーションを抱えるなどがないよう、カウンセリングや将来の機会供与を行うべき。

（日本からの訪問中）

- 12 月 18 日。ペシャワール大学イスラミックセンター、SPADO ペシャワール事務所、ペシャワール市内ゲストハウス会議室。
- 3 グループ、計：27 名（男性：24 名・女性：3 名）、宗教指導者：1 名。
- 提起された主要な論点は以下。
  - 青年たちはテロリズムと否定的な考え方にさらされている。縁故主義やえこひいきなどが蔓延し、人間関係とお金がないとうまくいかない。一生懸命働いてもうまくいかない事例が多く、働かなくなってしまう。
  - 何もすることがないとき，教育を受けていない場合などに、テロリズム・過激主義にさらされる。
  - 自分の利益のための宗教解釈が、宗教学校で、善し悪しが分からない 10 代を中心になされる。無教育のものを悪く導く、洗脳する。
  - 教育を受けている親は、子どもたちがそうならないように海外に送るものもいる。過激主義が広がったスワートからは別の場所へ移る人たちもいた。
  - ほとんどが 10 代だが、大学生でも。例えば、ペシャワール大学でエンジニアリングやテクノロジーを学んだ者で、IT エンジニアとして、トラッキングシステムを使うなど、タリバンで働く者もいる。経済状況から、自らが生き抜くため。
  - 若者の政策形成参加や代表制が欠如（大学・政府）。
  - 世代間ギャップが大きい。（社会全体での青年層が 60%）
  - 多様性に不寛容な社会。
  - 青年たちの置かれた経済状況の悪さ。
  - 能力強化のシステム、キャリアガイド、キャリアカウンセリングの欠如。
  - 青年の社会活動の場が少ない。
  - 大学への政党活動介入。
  - 学生の間の暴力の問題が深刻。
  - 青年の間での薬物の蔓延。（経験者が 7 割に上るとも）
  - 教育、動機付け、道徳向上が必要。
  - 親が望むことを子にさせるなど。

- ペシャワール大学イスラミックセンターの宗教指導者の方からの聞き取りは以下。
  - 生徒 650 人（センター全体？）

- イスラム教、人権、国連憲章との関係などが専門。
- 青年たちは、とにかくお金がほしい、銃しか知らない、といった者もいる。特にアフガニスタン国境沿い。青年たちにとってちゃんとした Institution がない、雇用の機会がない、お金が欲しいといったことから、過激主義へという状況がある。
- 日本政府資金で UNICEF と Learning for Empathy というプロジェクトを行っている。（Nov-Jan 2018?）
- KP 州のマドラサ改革。基本教育、交流、共生、社会のマナー、どう交流をしていくのかなどを教えている。青年を Mobilize する。

- 地域社会での活動はイマーム（宗教指導者）を通じてというよりは、直接教えている。ノーシェラのマドラサなど。
- SPADO のプロジェクトにも参加・協力している。現在の平和村ユナイテッド（PVU）-SPADO のこの活動に参加候補青年のリストを供与している。選考の基準（括弧は選考要素としての割合））：①技術は持っているが、どう使うか分からない青年（20%）、②平均的な青年（意欲はある）、③地方・FATA 出身者（community（メモ不完全）Skill がない）（50%）

- テレビのトークショー”New Morning”（Subscriber500 万人）にも出演。
- 愛と寛容などについて伝えている。

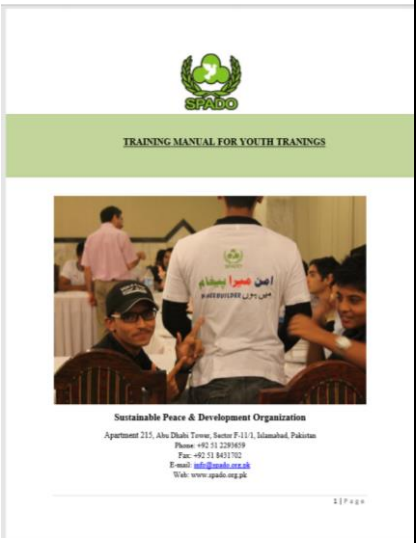
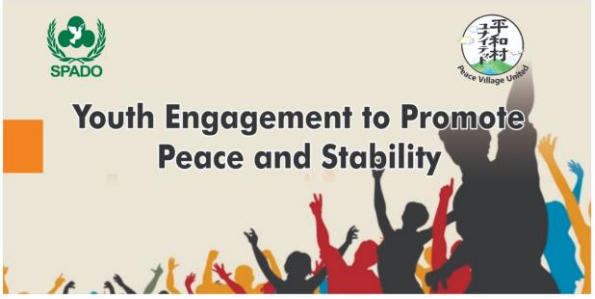
- イスラマバードからペシャワールへの道中の農村地帯でも青年たちとの協議を行った。主に、雇用や知識・技能を活かす場の欠如が提起された、

計画	③ 地域社会（指導者ほか）、市民社会（NGO や市民団体など）、政府・地方行政関係者（教育や青少年関係省庁部署）、宗教指導者、メディア、研究者などとの協議（10 回）（2 か月目 3・4 週、3 か月目 2・4 週、4 か月目 1 週）：プロジェクトについての説明と活動参加促進。青少年の意見を聞くことや、青少年のモチベーションを高めてもらうことなども要請。
報告	・ 11 月 15 日-12 月 5 日。地域社会、事務所、ゲストハウス会議室など。 ・ 地域指導者、政府関係者、地方行政関係者、10 回の会合で計：58 名（男性：55 名、女性：3 名） ・ 活動説明、現地状況意見交換、活動参加促進など。地域社会での青少年による平和活動のための経験共有やインプットがあった。活動参加青少年の候補者リストが提示された ・ 地域社会は過去に NGO の活動に否定的で、否定的な印象を持っていることもよくある。文化的に適切で、紛争地に特有の状況に敏感であるような方法に基づき、地域社会に積極的に関わってもらい、活動が地域社会に属しているという認識やオーナーシップを持ってもらうようにしている。 ・ KP 州の青年が暴力的な過激主義に至るものとして提起された点は以下。 　・ 青少年と地域社会との社会的つながりの欠如。 　・ 青少年の何らかの能力強化プログラムへの参加機会の欠如。

	・ 青少年間での社会的寛容が欠如。 ・ 青少年が抱く懸念や不安への解決について取り上げるメディアの欠如。 ・ 教育システムが不十分。教育へのアクセスや質が均一でない。さらに様々な層の青年間でギャップがある。 ・ ペシャワールの青少年の様々な層が利用できるような適切な対話の場がない。 ・ 大学生の大半が薬物を使用しており、それによって、多くの争いが引き起こされている。 ・ ペシャワールでは、全政党がそれぞれの青年部を持っており、政治的な相違によって、争いごとをもたらしている。

【活動 3：青少年ワークショップ】

計画	④ 研修に参加する青少年 150 名の選定と活動趣旨内容説明・参加促進（2 か月目 1 週-4 か月目 1 週）：選定には地理的分布、ジェンダー、民族、宗教/宗派、（紛争による）障がい、年齢、個人的背景などをできるだけ考慮。**宗教学校（マドラサ）の生徒も含まれる可能性あり。**
報告	・ 12 月。地域社会ならびに大学。 ・ 青年グループリーダー、地域社会の人びと、政府関係者ほか。 ・ 候補者リストは、上記に言及したリストと加えて、青年リーダーたちからも提出。 ・ 上記の人びととの協議、会合も経て、考慮基準に基づき、選定。 ・ アフガニスタンや連邦直轄部族地域（FATA）出身者、イスラム教徒（スンニ派、シーア派）、ヒンドゥ教徒、シーク教徒、キリスト教徒、女性たち、トランスジェンダー、チャレンジドの青年たちを含む多様な層の参加となっている。過激化が広がり、他者を攻撃・排斥するような状況があった紛争地にて、画期的なことである。

計画	⑤ ワークショップ実施（5 回）（4 か月目 2 週-5 か月目 2 週）：選定 150 名を対象とした、民主主義、平和構築、リーダーシップの研修。参加者の能力強化のため、グループワーク、ロールプレイ、プレゼンテーションなどの様ざまな手法を用いた参加型研修ワークショップを実施。
報告	【準備段階】 ・ 「2. 関係者との協議」の中で、WS 内容や組み立ての準備として、KP 州の各所で、青少年の抱える課題、青少年の能力、地域にある紛争、どのようなトレーニングやそのためのマニュアルが必要かを探るための協議や調査を行っている。 【マニュアル】 ・ 実際に WS を行う際の実施用マニュアルを作成した。下記の WS の組み立てにあるような構成と内容となっている。 【WS の実施】 ・ 1 月 18・19・25・26 日（全 5 回のうちの 4 回を実施）。3 月 10 日（5 回目：女性のみ 30 名。）ペシャワール市内のゲストハウス会議室ほか。 ・ 計：150 名（男性：94 名・女性：56 名） ・ WS の結果として、不正義、社会的な統合性や寛容の欠如、宗教・宗派間の共生の欠如などが不満や挫折感を作りだすことにより、地域社会から暴力的な過激主義がもたらされていることが分かった。地域社会にくらし、その紛争の文脈を理解している地域社会の人びとや青少年が、信頼や非暴力による紛争解決のプラットフォームを与えられれば、暴力的な過激主義に対抗することができる。この WS や活動がそうしたプラットフォームを作り出すものとなっている。こうしたプラットフォームや大きなピースビルダーの集団が必要。 ・ またこの WS で、多様な集団のつながりをもたらすことができた。 ・ パキスタンーアフガニスタンの青年間でもネットワークを作り出すことができた。相互間で信頼と平和を促進する社会アクションプロジェク作成の作業ができた。  【WS の組み立て】 1. WS の説明とアイスブレーキング： ・ この WS に期待するものを参加者で書いて壁に貼りだし、WS の途中にも、これらが満たされたかなどを参照するなどした。また、隣に座っている人のことを知り、参加者に紹介するなどを行った。  2. アイデンティティと信頼構築： ・ 「自分も人も知る自分」「自分が知る人が知らない自分」「自分は知らないが人が知る自分」「自分も人も知らない自分」を理解するなどし、それぞれがそれぞれに特有の環境の中でアイデンティティが形成されることを理解する。 3. 紛争の理解と紛争の分析 ・ 「コンフリクト・ツリー」のワークなどを通じ、紛争の原因・きっかけ・主体・現象・影響など理解。 ・ その後、参加者はグループに分かれ、上記の紛争分析に基づき、地域にある紛争について書いてみる作業を行う。グループによって、以下の紛争が提示され、作業が行われた。（「G」はグループ） （WS1）G1：パンジャブ州と KP 州の人びとの紛争。G2：シーアとスンニの紛争。G3：連邦直轄部族地域（FATA）の KP 州への併合。G4：カシミール問題。G5：アフガニスタンとパキスタンの紛争。 （WS2）G1：宗派間紛争（シーアとスンニ）。G2：2 つの家庭の間での衛生やゴミ投棄の問題。G3：隣家

の間でのゴミ投棄の問題。G4：大学生の間での紛争。

（WS3）G1：農業大学で起こった問題。G3：女性の教育とハイバル管区。G4：マルダンの大学で大学生（Mishal Khan）が暴徒に殺害された問題。

（WS4）G1：学生の間での紛争。G2：私人間の土地をめぐる争い。G3：食材をめぐっての争い。G4：土地をめぐっての争い。

（WS5）G1：女性の教育をめぐる二人の少年の争い。G2：教育を受けることに関する二人の女性の　争い、G3：ゴミ投棄をめぐる二人の女性の争い。

4. コミュニケーションについて（議論・対話・討論）

・ 様々なコミュニケーション手法について学ぶ。まず相手の意見を聞くこと、状況によって、取るべきコミュニケーション手法があることなどを理解する。

5. 交渉の手法

・ 紛争、争いごとを解決するための様々な交渉の手法を学ぶ。

6. 社会アクションプロジェクトの説明と形成作業

・ こうしたアクション自体になれていない青年たちに、アクションがどういうものかを、様々な例のビデオ紹介なども行いながら説明。その後、グループに分かれて、自身の地域をよくする、そして、そこにある紛争を解決するアクションプロジェクトの形成作業をしてもらった。

・ 現段階で、以下のプロジェクト案が提示された。（1）紛争によって破壊された地域の寄り合い場「ヒュジラ」の復興（2）宗派間共生のための青年ピースビルダーの役割（3）紛争や過激化によって失われた平和的なパシュトゥ詩の復興と平和詩人墓所参拝（4）包含的な社会秩序維持についての議論（政府政策に関して）（5）読書会を通じた多様なグループの平和的共存（6）イスラムにおける女性の教育（7）アフ・パク青年間の相互信頼のための対話（8）健康と衛生に関する意識啓発活動（9）薬物乱用の影響に関する意識啓発（10）平和構築における青少年の役割に関する討論会（11）養護施設の子どもの支援（12）ストリートアート（13）パシュトゥン（アフ・パク　両国にまたがる民族）社会における女性の教育の重要性（14）パシュトゥン社会における女性にとっての職業訓練の重要性（15）地域の紛争解決についての対話

	7.　イスラムと平和（講師：ペシャワール大学イスラミックセンターの宗教指導者） ・　イスラムが平和の宗教であることを、クルアーンや歴史なども通して説明。

計画	⑥　その後、参加者を、それぞれの地域、技術、所属を考慮してグループに分け（各グループ 10 人*15 グループ =150 人）を予定）、地域での社会活動のためのアイデア共有を行ってもらう。**青少年自らがプロジェクト案を作成**するのをサポートする。
報告	・　計画どおり実施。

計画	⑦　青少年の地域社会関与に必要な人・資・機材などの準備、作成、提供（4 か月目 2・3 週）
報告	・　計画どおり実施。アクションに必要なバナー、スタンド、資機材、文具・参加証、優秀者賞品なども準備。

【活動 4：社会アクションプロジェクト（ピースアクション）】

計画	⑧　メンター（助言者）がそれぞれの青少年グループに割り当てられ、グループと密接に協力し、地域での社会活動プロジェクト案（15 グループで 15 プロジェクトを予定）の完成と実施をサポートする。メンターは、平和構築に関するトレーニングを積んだ、現地パートナー団体（SPADO）（後述）スタッフ、もしくは活動地ペシャワールを拠点とする平和構築に関わるネットワークのメンバーで様々な組織で働くシニアの SPADO 協力者たちが務める。**宗教学校（マドラサ）の生徒が参加している場合、生徒たちが実施したいプロジェクト案を提供するため、宗教指導者と協働する。**（4 か月目 2 週-6 か月目 4 週）
報告	・　計画どおり実施。

計画	⑨ 青少年が地域社会に働きかける形でプロジェクトの実施を主導（5 か月目 3 週-6 か月目 4 週）：プロジェクトは活動 3 に参加した青少年自身の案によるものだが、考えられるものとして、青少年センターの設立、スポーツや文化のイベント開催、地域の争いごとの原因になりうるゴミ捨て場の清掃キャンペーン、地方選挙や地方行政への働きかけなどがある。
報告	・ それぞれの地域社会が直面する必要性や問題に応じ、地域社会の住民、議員、政府・自治体、学校、宗教、市民団体、メディアなど関係者ほか地域社会の人びとも広く参加し、青年たちが立案した以下の 15 のアクションを実施。

（1）平和に関する討論大会（2）パキスタン&アフガニスタン・ユース対話（3）紛争や過激化で失われたパシュトゥ詩の復興（4）健康・衛生の啓発活動（5）ストリート・ピースアート（6）読書クラブ活動（7）薬物乱用に NO！キャンペーン（8）宗教・宗派間共生の啓発活動（9）グループハウス（養護施設）の子ども支援（10）紛争や過激化で失われた地域の寄り合い場「ヒュジラ」の復興（11）過激思想に対するイスラム学者の統一見解に関する議論（12）パシュトゥ社会における女性教育の啓発活動（13）パシュトゥ社会における女性にとっての職業訓練の役割についての啓発活動（14）地域社会の紛争を防ぐための議論（15）イスラムにおける女性の権利に関する議論

①平和に関する討論大会：絶え間なく戦闘が続いてきたアフガニスタンとの国境地帯「FATA：連邦部族直轄地域」（行政責任者が広範な権限。集団責任も問える など）の隣州合併に伴う課題、政治における女性の役割、また「ブレグジッド」について討論。

②パキスタン&アフガニスタン・ユース対話：後者は主に難民三世。恣意的な情報に惑わされず、個人レベルで相手を知り、信頼を育む必要性などを話し合った。

④健康・衛生の啓発活動：イスラムの教えにも基づきながら、地域社会で情報・意見交換。

③紛争や過激化で失われたパシュトゥ詩の復興：
自由な社会･文化活動が難しくなり失われてしまったパシュトゥ詩。自作や著名な詩をよみ、詩による平和や社会への役割を語り合うコンテスト。パシュトゥ語に関するクイズや伝統的な踊り「アタン」も披露された。

⑤ストリート・ピースアート：
荒れた通りが暴力や争いを呼び込んでいるのでは？青年たちは清掃をし、ピースアートを描いた。アートは表現・創造・自由・平和を体現。地域の人びとも集まり、友好の場となった。

⑥読書クラブ活動：多様な価値観を知る読書会。今回は「老人と海」(E. ヘミングウェイ）を取り上げ、「困難に取り組むこと」「諦めないこと」「仕事を愛すること」などを話し合った。

⑦薬物乱用に NO！キャンペーン：青年層を中心に深刻な問題になっている薬物乱用。武装勢力の資金源との指摘も。その危険と身を守る方法について学び合った。ポスターにあるのは「薬物乱用に NO」「薬物乱用は死のもと」「薬物乱用をしないことは人生を愛すること」「治療は明日でなく今日から」「薬物乱用の害について」。

⑧宗教・宗派間共生の啓発活動：ニュージーランドやスリランカでの他宗教信者への攻撃・殺害事件や、あおられる偏見や誤解などもとりあげ、常に注意を払って、不寛容にならないようにすること、憲法がマイノリティの権利を保障していること、多数者側や国家の役割があること、共生なしに平和は訪れないことなどを学び合った。

⑨グループハウス（養護施設）の子ども支援：施設に暮らす多感な子どもたち…様々なリスクにさらされやすいとも。SNS の平和的でポジティブな利用や、過激思想によるその悪用がよくないことなどを伝えた。椅子取りゲームもなども行い、楽しい時間も。女性ユース主導。

⑩紛争や過激化で失われた地域の寄り合い場「ヒュジラ」の復興：平和的な議論や問題解決の場としても機能していた「ヒュジラ」は過激集団からの標的となった。ほかにもゲストハウス、青年の学びの場でもあったが、西欧的な政治・司法制度、近代化（商業的食堂、テレビ、大都市移動）などによっても失われていった。青年たちは参加した地域の年配者たちとともに、その役割を再確認し、その復興について話し合った。

⑪過激思想に対するイスラム学者の統一見解に関する議論：政府の要請によって示された1,800ものイスラム学者の共通見解を記した“Paigham-e-Pakistan”（ペハミ・パキスタン）「パキスタンのメッセージ」について学び合った。いかなる過激思想も、宗教・宗派間憎悪の扇動も非難されており、シャーリア（イスラム法）の強制や武装闘争は許されていないことなどを確認した。

⑭地域社会の紛争を防ぐための議論：年配者を招き、その経験や考え方を共有してもらいながら、土地、教育、金銭、文化、薬物依存、貧困、非識字など、社会ではどのような問題や争いに直面するのか、そして、コミュニケーションや対話、人びとの間の結束や調和、教育、寛容の精神などを用い、どのような方法で問題を解決するのかについて話し合った。

	※以下、女性グループのアクションは、現地での女性がおかれた状況や、本人たちの希望により写真掲載ができなかった。 **⑫パシュトゥ社会（アフ・パク　両国にまたがる民族）における女性教育の啓発活動**：女性の教育は不要とする人や環境も存在しているが、女性の教育はその子どもの教育にとっても必要で、さらにそのことが社会の教育にとっても必要であること、また、教育によって自信が与えられ、侵害された権利などに声を上げることができること、イスラムにおいて男性にとっても女性にとっても教育は義務とされていることなどを学び合った。参加者の一人は、この学び合いで励まされたので、家庭環境から学業を中途であきらめたが、再開を両親にうったえる、それでだめでも一人でも続けると述べた。 **⑬パシュトゥ社会における女性にとっての職業訓練の役割についての啓発活動**：職業訓練を受けることで女性たちは自立できること、家計の助けになること、貧困の削減が社会の平和にもつながることなどについて学び合った。また、話をしてくれた職業訓練センターのトレーナーが、家計が苦しかったことから、幼少期に縫製や服作りの技術を学んだこと、連絡先を配ってビジネスをはじめ、貯金もできるようになったことなどの経験を共有した。 **⑮イスラムにおける女性の権利に関する議論**：相続や教育の権利のように、女性に男性と同じく権利が認められていること、しかしながら、女性の権利を認めない男性や社会環境も存在すること、女性の権利への知識がない（特に女性たちに）ことが問題であり、教育を受けることではじめて権利についてうったえることができることを確認した。

計画	⑩　プロジェクト実施中、青少年、政治指導者、宗教指導者、政府当局およびメディアなどの間の調整と協力を発展させ、強化する。（5 か月目 3 週-6 か月目 4 週）
報告	・　特にアクション実施には、地域社会の住民、議員、政府・自治体、学校、宗教、市民団体、メディアなどの関係者ほか、地域社会の人びとも広く参加した。政府当局（情報への権利局）からは支援の書面も発出されている。また、宗教研究者がワークショップとアクションに参加している。活動実施のための協議や、活動全体を通じて、こうした多様な人びとの層との調整と協力を行っており、強化されている。

計画	⑪　若者のオンラインでの効果的なキャンペーンとコミュニケーション能力の向上のための、映像・動画制作、ソーシャルメディア発信、グラフィックデザイン、デジタルおよびキャンペーン戦略の研修とメンタリングプログラムを通じ、青少年ネットワークを促進・強化。（随時。特に後半）
報告	・　この活動を通じ、参加青少年たちによる WhatsApp グループが形成されたほか、Facebook の交換なども行われ、これらを通じて、活動に関する意見、課題、解決方法などを出し合った。また、これらを通じて、青少年たちの雇用、奨学金、インターンシップなどの情報交換なども行っている。

計画	⑫　（社会アクションプロジェクトに直接関連しないが）活動参加者に、暴力の可能性をなくすために、平和と寛容を促進する民主的な対話と議論の場（現地パートナー団体が行っているその他のセミナー、ワークショップ、会議、オンラインのソーシャルメディア企画など）を提供。（随時。特に後半）
報告	・　特に現地パートナー団体が行っているその他の機会というわけではないが、当活動を通じて、公式、非公式にこうした場を提供した。

活動５：アフガニスタンとの交流・平和のための両国間の連帯】

計画	⑬ 活動に関わった青少年たちのネットワークの構築と、ソーシャルメディアやその他のコミュニケーションチャネルを通じて、アフガニスタンの青少年たちとの交流や連携・連帯を行う。パートナー団体（SPADO）がこれまで両国の平和や、相互理解、信頼醸成のために連携・連帯してきたアフガニスタンの青少年たちやパキスタンのアフガニスタン難民などと実施（随時。特に後半）。
報告	・ 青少年ワークショップや社会アクションプロジェクトを含め、当活動に参加した青少年には、アフガニスタンの青少年（主に難民３世）が含まれている。よって、活動自体が、両国の青少年たちによってともに実施されている。さらに社会アクションプロジェクトの１つが両国の青少年の対話であった。また、上述の、参加青少年たちによる WhatsApp グループや Facebook などを通じて交流が行われている。それぞれの社会に関係する文化、食べ物、音楽、社会活動に関して話し合ったりもしている。

計画	⑭ アフガニスタンで平和教育など平和のための活動を行うアフガニスタン現地 NGO（Your Voice Organization：YVO）とそのパートナー団体の日本国際ボランティアセンター（JVC）スタッフを招いたアフガニスタンの平和活動との経験交流や平和のための両国間の連帯、ならびに活動に関する協議やモニタリング（時期は治安状況も考慮しながら判断）。
報告	・ 両国間の関係悪化が改善されない中、アフガニスタン人のパキスタンビザ取得が困難になり、YVO スタッフもビザを取得することができなかったため、JVC の日本人スタッフと当団体だけのパキスタン訪問となった（12 月 14-24 日）。現地では、上記、【活動２：関係者との協議】での報告の通り、青少年や関係者と会い、現地の状況について確認するとともに、アフガニスタンの状況についても伝え、両国の連帯を図った。現地パートナー団体 SPADO スタッフとも活動に関する協議やモニタリングを行った。

以上